



性感

淫魔エステ

EROTIC ESTHETIC
BY SUCCUBUS GIRLS

探精コースはじめました

小説 高岡智空

挿絵 草上明

立ち読み版

第一章	モテる男、養成エステコース	006
第二章	出稼ぎ淫魔たちの裏事情	057
第三章	姉より強（エロ）い妹などいない	118
第四章	淫魔の読み違い、人の結果	155
第五章	搾精エステ、種付けコース	216
エピソード		263

登場人物紹介

さくま
◎佐久馬カレン

エステティックサロン「MONM」の美人エステティシャン。肉感的な容姿で慈愛に満ちた笑顔。今回和希に声をかける。



さくま
◎佐久馬ルミナ

カレンと同じエステティシャンながらこちらは研修生。無邪気に和希に接し、カレンとも深い関係。

こしがや かずき
◎越谷和希

珠理に告白するも撃沈、その際に自分の旺盛な精力が問題に。



すどうじゅり
◎須藤珠理

主人公と幼なじみの女の子。公認カップルであるはずなのだが……。

◎クローディア

MONM のオーナーの娘。アルラウネのお嬢様で爆乳&触手つき。

「……？ あと少しなんです、だめでしょか——あ」

「くふつつ……うつ、あ……あぁっ……」

懸命の制止も間に合わず、カレンがなにかに気づき、動きを止める。和希に跨っていた太ももやお尻を、指圧しながら下方へずらしていた彼女が次の瞬間、そのお尻で踏みつぶしたものは、強固にいきり立った和希の身体のある部分だった。

（ま、ずっ……さつき、注意されたばっかなのにな……）

性的興奮を抑えるのが大事、と言われたことを思いだす。しかしもう遅い、なにかを確認するように彼女が二度三度、お尻を上下に揺らし、振り返ったペニスをグニグニと圧迫し、柔肉で包み込むように擦り上げてきた。

「失礼しました……そういえば最初から、和希さんのここ、こんな状態でしたものね？ もっとも、最初はここまで大きくなっていませんでした……私の水着のせいでしょうか。それとも、エステでこうなったのでしょうか……ねえ和希さん、どうなんです？」

「あ、う……その、そ……これは——あぐつつ！」

指圧していた指先が、腹筋の溝をいやらしくなぞってくる。その一方で腰を浮かせ、水着を押し上げていた亀頭に突かせるように、お尻を擦りつけていた。

「答えられません？ でしたら——私が、教えてあげますね……」

ローション塗れになった水着越しのヒップがクルクルと円を描き、まるで柔らかかすぎる手の平で撫でられているような感触だった。水着から染みだしたローションは肉棒もベトベト

に汚しており、その状態で水着の裏地に亀頭を擦られると、たまらず腰が跳ね上がり、ペニスまでがビクンッと震えてしまう。

「和希さんのオチンポは、私に触られて……やらし〜く、お勃起しちゃったんです♥」

「あぐつつ……くあああつつ！」

浮いた腰が下ろされ、お尻と股間にギュッと潰されたペニスが、彼女の股間を押し上げるように膨らみ、ビクビクッと躍動する。刺激を受けた男根の反射的な反応、それを受けたカレンは悪戯っぽく微笑むと、より強く体重をかけ、腰を前後に揺らした。

——又チュツ、クチュグチュツ……又チャツ、ニチャアア……

「ふっぐうつつつ！ はあつ、あつ……んうつつ……」

ゾクゾクゾクッと背筋を電流が駆け上がり、和希は大きく背を反らし、みつともなく身悶えてしまう。そんな自分を見下ろすカレンと視線が合うと、恥ずかしくてたまらなくなり、和希は両腕で顔を覆い隠した。

（や、ばいっ……めっちゃ、見られてっ……くっ、うううっ！）

快感に悶える顔を見られ、声を聴かれ、羞恥で耳まで赤くなる。だが、それすらも快感へと変化し、勃起は彼女の股間でさらに大きく膨らみ、ビクビクと躍動を繰り返した。

「ね、和希さん……勃起、しちゃってますよ？ すっごく硬いです、ほら♪」

こちらが答えないから、からかって楽しんでいるのか。股間で圧迫したまま腰を振り、ローションを塗りたくるように抜き上げてくる。互いの水着で阻まれているとはいえ、こ

れはもはやエステではなく、風俗で言うところの素股そのものだった。

「ちゃんと答えてください、和希さん？ エステで身体ヌルヌルにされて、気持ちよくつて、こんなに大きくお勃起しちゃったんですか？ ダメとは言いませんが……ふふつ、性行為でもないのにこの反応は、男性としてちよつと恥ずかしいかもしれませんね？」

矢継ぎ早に言葉を降り注ぎながら、カレンの腰振りは徐々に速くなり、それに伴って痺れるような快感が肉棒に込み上げる。足の付け根から肛門の奥へ突き刺さり、下腹部にまで熱く染み渡ってきた。

「やつ、ちがつ……くつふううつ！」

「なにが違うんですかあ、違いますよねえ？ うつふふ……」

否定しようとする唇が、肌に着う指の動きで塞がれてしまう。気がつくとな彼女の手は和希の胸元に触れており、綺麗に整えられた爪先でカリカリと、ローション塗れの乳首をくすぐるように擦っていた。

「ほら、こつちもピンピンに尖ってます……勃起チンポと同じですよ？ すぐく可愛らしいですけど、同時にすごく恥ずかしいことですよねえ……こんな風に、どつちもすぐ勃起させちゃってたら、女の子に笑われちゃいます……ふふつ、あははははっ♪」

（や、めっ……い、言わないで、くださいいっ……あぐつ、くあああつ！）

笑い声を浴びせられるたび、消え入りたくなるほどの羞恥が込み上げる。だがそれと比例して、膨大な快感が脳内を埋め尽くし、全身に信号を送り、身体中を過敏にする。その

せいで乳首はさらに硬く尖り、肉棒は痛いほどに跳ね膨らんで、彼女の股間に挟まれ、扱かれるばかりだった。

「ほくら、和希さんのオチンポ……アルバイトのエステ体験で、ガッチガチのフル勃起さんになっちゃいましたね〜？ こうしてえ……んっ、ふうんっ……ふふっ、お尻でスリスリしてるだけで、ず〜つとチンピクしてますよ？」

「うっ、ふああっ……なんっ、で……そんな、言い方っ……ふぐつつ……」

嘲笑しつつも楽しむような彼女の口調は、和希がこうなるのを知っていた——いや、待っていたというような態度にも感じられる。そして、丁寧で清楚な先ほどまでの姿ではなく、むしろこちらのほうが彼女の本性のように思えてきた。

（も、もしかして、カレンさんって……そういう、DSな……あぐうっ！）

想像している余裕などなく、乳首とペニスへの擦過刺激によつて、すでに辜丸はせり上がり気味、精液も半ばまで込み上げてしまっていた。尿口もパクパクと開閉を繰り返してヒクつき、透明のカウパーがドロドロと流れ、卑猥な音が響きます。それでも腰を引き、括約筋を締めつけ、なんとか決壊を避けているというギリギリの状況。まだ擦り始められて、数分ほどしか経っていないのに、それで射精なんてしてしまえば——。

（それだけは、絶対にいいっ……ふぐつつ、くおおおおっ！）

このハイテンションなカレンになんと罵られるか、想像しただけで興奮——もとい、恐ろしくなってくる。和希は泣きそうな顔で彼女を見上げ、懇願するように口を開いた。

「カ……カレンさんっ！　お願いです、止まってください……こ、このままだと——」

大変なことになる、そう続けようとしたのだが、和希の声を聞いたカレンはニンマリと唇を緩めたかと思うと、またしても上半身を密着させてきた。

「はい、どうされましたか、和希さん？」

「——っつ……あつ、な……にをつ……ふぐううっつ！」

しかも今度は顔をずらしたりせず、真正面から見つめ、開いた桃色の口腔から漂う甘い吐息が、ハアハアと鼻先に浴びせかけられる。花蜜を思わせるような、濃厚な香気に当てられた和希は、鼻腔を甘さで満たされる快感に、ゾクツと背筋を震わせた。

しかも、素股刺激で完全に意識から離れていた、女性の象徴ともいえるべき魅力的な二つの塊が、過敏になった乳首に押し当てられ、いやが上にも牝を意識させられる。柔らかく滑らかな女性の象徴が触れている、それを感じるだけで堪えようとしていた快感の波は一気にペニスを駆け上り、彼女の股間をベチベチと叩いていた。

「んあつ……ん、もうっ……イタズラっ子な、オ・チ・ン・ポ……さんっ！」

そうささやきながら彼女は隙間なく和希に抱きつくと、下腹部でペニスを圧迫し、ローションを潤滑油にして、全身を一気に下方へ滑らせた。

——ズツチュウウウツツツ、又チュルウウツツツ、グチュオオオツツ！

（うおあああっつ!?　やばいつつ——無理っ、あああっつ！　もう無理だああっつ！）

短いストロークで同じ快感を浴びせられていた素股、それに乳首への愛撫と、巨乳の感



触で限界まで牡欲を引き上げられていた和希は、悲鳴のような嬌声を響かせてしまう。絶頂寸前というほど過敏に研ぎ澄まされたペニスが、下腹部からお腹、乳房——滑り下りた彼女の異なる柔肌でねつとりと扱き上げられ、理性の抑止は簡単に吹き飛ばされていた。

「ひぐううううっ!? くはあっつ、ひやああああ——つつつ!」

——ビュククツツ……ドピユドピユドピユウ~~~~ツツ!! ドビュグウウツツ!

目の眩むような快感が突き抜け、尿道を押し開き、勢いよく熱液が噴きだしてゆく。解放感と放出感に背筋を痺れさせながら、恍惚とした表情を蕩けさせ、和希は自らも腰を浮かせ、情けなく振ってしまう。

(あぐっ……で、出ちまった、しかもっ……全然、止まんねえっ……)

施術してくれたカレンに対し、申し訳ない気持ちでいっぱいになるが、快感を貪ろうとする牡欲が、本能に鞭を振るっているようだった。その刺激と快楽に促され、そしてそもそも、こちらを見下ろす彼女が刺激したせいだという言い訳が免罪符となり、和希はさらに何度も、ペニスを大きく爆ぜさせ、快感に酔いしれる。

——ビュルルツツ、ビクツツ……ドプッ、ドプツツ……ビュクンツ、ビュルウツ……

四肢の先がジンジンと痺れ、目の前が真っ白に染まり、思考が働かなくなるほどの強烈な快感が、ペニスの脈動とともに脊髄を往復していた。もちろん、身体の猛りを解き放つようなその快感に合わせ、カレンの指は乳首を弾き、揉みながら扱いている。まるで乳首をペニスに見立てたようなその動きで、大量の熱液を水着の中にプチ撒けてなお、肉棒の

膨張は治まってくれなかった。

「くあううつつ……あつ、はあつ……つ……はあつ、はああ……」

「んふつ、あああ……すつごい、ドクン、ドクンッて……チンポ汁、水着の中に暴発しちゃってますね……ほら、押し当てたお腹に、熱いの伝わってますよ……？」

ぜーぜーと息を吐きながら痙攣する和希にすり寄り、顔を間近にまで寄せたカレンが、嬉しそうな声を響かせる。そこには、先ほどまで和希をいたぶっていた意地悪な、かなりSっ気の強い態度は、感じられなかった。

「我慢するのに、射精しちゃいましたね。ふふつ……ドピュドピュ、気持ちよかったですか？ あーあ、すつごい蕩け顔になって……体力ごと搾られちゃったって表情してますけど、まだまだ勃起も硬いです。ほら、こんなに……」

「あつ、ああつ！ ちよつ、触るのはつ……くううつ……」

身体をずらし、曲げた膝裏と手の平で亀頭を抱き締めたカレンが、絶頂直後の敏感な亀頭を柔らかく刺激する。それだけで腰が震え、目の前に火花が散るほど心地よい。

「さすが一日8回の男ですね、和希さん……この回復力は、すつごく魅力的ですよ♥」

膝の間に挟まれた勃起から、精液を絡め潰すような卑猥な音が、グチュ、又チュと絶え間なく響く。水着内のヌルついた刺激と、勃起を脚で扱われるという屈辱的な状況に興奮を煽られ、和希はまたみつともなく声を上げ、腰を跳ねさせた。

「んうふつ……はあつ、ふう……あの、カレンさん……」

「ふつつ、あああつ……ルミナ、それつ……くうつつ……」

「なあに、くすぐりたい？ ちょろつと我慢しててね……よいしょ、よいしょ」
情けなく声を震わせてしまったが、彼女の手の動きは止まらない。そのまま手の平は入念に胸全体を弄って、胸筋の形を確認するように指を這わせながら、それでいて乳首への刺激は一切怠らなかった。手の平で圧迫刺激を与えていたかと思えば、勃起したそれを水かきでスリスリと擦り、時折折わっているかのように指先で摘み上げ、ほんの少しのタッチで扱ってきたりもする。

（こつ、れつ……わざと、なのかつ!! あぐつつ……おつ、ほおおつ……）

だが、その判別がつかないうちに彼女の手は次々と動きを変えて、乳首はひたすら、異なる刺激の繰り返しに翻弄されるばかりだった。勃起どころか、和希が快感を得ていることすら気づいていないのかもしれない。抱きついた彼女はクスクスと肩越しに笑いを響かせながら、瞬く間に胸元をローション塗れにしまった。

「はーい、お胸のマッサージ準備できたよ？ これがね、ジワーッてお胸に染み込んでつてえ……身体の内側から、ポカポカしてくるの。おにーさんの身体を熱くさせて、私の感触が馴染むように……身体の奥から表面まで、作り変えてくれるの……ふふっ♥」

触れるか触れないかというほどの唇の感触が耳朶を掠め、ビクンッと大きく腰が跳ね上がった。だがそちらを気にする余裕もなく、彼女の言葉通り、身体の芯がジワジワと熱くなってきたかと思うと、彼女の指がラインを引くように胸元を撫でる。

「はぐうつつ!? あっ、ひっ……ちよつと、いまのっ……」

「筋肉のほぐれ具合の確認だよ♪ うんうん、いい感じにや〜らか〜い」

ラインを引きつつ、指先だけで胸筋を押し込み、その合間合間に乳首への刺激も忘れないう。片手だけで胸を弄ばれ、それで無様に喘がされている——セーラー服を着ている少女相手に。それを自覚するだけで羞恥が込み上げ、身体はますます熱く火照る。なのに興奮はまるで治まってくれず、勃起が何度も跳ね、下腹部をビタビタと叩いていた。

「ほんっ……とつつ! にっ、さっ……うぐっ……ルミナ、あのっ……」

「なにかなあ、くすぐつたい? それとも、気持ちいい? えっへへ、ルミナ上手でしよ〜? 研修生だけど、マッサージはすごい褒められるんだよ、お客さんにも♪」

確かにその手つきは筋肉を的確に擦り、緩やかな刺激でほぐし、蕩かしているのがわかる。そして胸元を撫でつつも、もう片方の手は腕や肩、首筋をやんわりと揉みほぐしており、和希の腕はたちまち弛緩させられていた。

「それじゃ、次はこっちです。はい、交代でえ……こっちの肩も、モミモミ〜」

腕の位置が変わり、反対の肩をマッサージされる——が、胸への刺激も止まらない。しかも身体が密着しているせいで、背中には慎ましくも幸せな感触が延々と擦りつけられており、それがさらに和希の官能を刺激し、バスタオルに染みを作らせる。

「——あっ、ずつつ……くうっ、やばいっ……先走りで、タオルが……んぐつつ!」

気づかれないようにタオルをずらそうと、腰と脚を振ろうとする。だが、その動きを見

咎めたルミナが不意に脚に力を込め、動こうとする和希の動きを止めた。

「こゝら、動いちゃダメでしょ〜？ くすぐりたいからつてモジモジ動いちゃうなんて、

■と同じだよ？ おにーさんは、お子ちゃまじゃないもん、我慢できるよね〜？」

（くっ、なんなんだこの煽りはっ……つつか、くすぐりたいだけなら我慢するわ！）

原因がそこではないことに気づかない辺り、ルミナのほうこそまだまだ■で、研修生らしいと感じられた。だが――。

「――ああ、違ったっけ？ だつておにーさんは……ちよ〜つとチンシコされちゃつたら、すぐにぴゅぴゅ〜つておもらししちゃうくらい、堪え性ないもんね〜？ あははっ♪」

「――つつ!？」

ささやかれた言葉にビクッと全身が震え、動けなくなってしまう。表情は強張り、信じられないという表情で、彼女を振り返っていた。

「なん……で、それ……」

「ふふっ……今日もいっぱいおもらししたでしょ？ 気づかれないって思ってたあ？ くすっ、おつかしい……こゝんなにザーメンの匂い、プンプンさせてるくせに♥」

耳元で鼻をヒクヒクと動かし、柔らかな鼻息を押しつけながら、不意に耳朶が舐め上げられる。痺れるような快感に嬌声をもらすと、さらに笑い声は大きく響いた。

「くすくすっ……いまだつて、ルミナが入ってきたときからず〜つと♪ オチンポピンビンの、ガチ勃起状態だよねえ？ カウパードロドロで、タオルに染みまで作っちゃう、ぜ

「んぜん我慢できない オチンポ……見た目は大人、中身は……って感じ♪」

「んくうつつ……ばっ、馬鹿に、すんなっ……誰が——あぐつつ！」

舐め上げられた耳朵が唇で優しく食まれ、同時にルーズソックスを履いた足がバスタオルをどかし、そそり立った肉棒を足裏でサンドイッチにする。

「ね、これカレンちゃんのせい？ それともルミナのせいかなあ？ おにーさん、おっきいのとちつちやいのどつちが好きなの？ ロリコンさん？ おっぱい星人さん？」

「なっ……いきなり、なに言っつ——くっ、おっつ、おおおっ！」

ズリズリと足裏が上下に動くと、蒸れたソックス裏の感触に、流れ込んだローションの湿り気が加わった、絶妙な潤みがペニスを包み込み、精液を誘うように扱ってきた。布地がネットリと絡みつき、それが足裏の温もりで仄かな熱を孕んで、ペニスの感度を少しずつ高めているようにさえ感じる。

「ふっ、あっ……んぐっ、あああっ……」

「……ふうん、これだけ感じちゃうっことはあ……やっぱりにおにーさん、ロリコンさんだっつことだよね♪ ルミナでおつきくしてくれたんでしょ、うれし〜っ！」

「い、やつ……それは、ちが——んぐっ、おああっ！」

太ももが腰を抱いて、足裏がピツタリとペニスを包み込み、左右でずらすように扱き上げ、甘い快楽を注ぎ込まれる。両腕は腋の下から和希の胴を抱き、両手はもう誤魔化す必要はないとばかりに、和希の勃起乳首を痛烈に捻り上げていた。

「こ・れ・はあ、お礼です」 ルミナのこと見て、ロリコンチンポ硬あくしてくれたお礼に、おにーさんの大好きなフル勃起乳首も苛めてあげる！ ほーら、シコシコー」

乳首と指、双方のローションが絡まってニチャニチャと音を響かせ、粘り気のある濃い糸を引きながら、執拗なまでに愛撫を繰り返されてゆく。摘まれ、揉まれ、扱かれ、かと思えば押し潰されて擦られ——反発するようにニプルがさらに硬く尖ると、そこに爪まで立てて、甘く掻きながら刺激を広げてくる。

「ひゃふつつ！ んつ……くつ、いい加減に……あぐつつ、おあああつ！」

「あつは♪ ロリコンおにーさんでも、乳首で感じちやうのは恥ずかしいの？ かつわい、みつともなく見栄張ろうとして、結局我慢できないんだあ♥ うるさい声で喘ぎまくっちゃって、チンポも乳首もビンッピンだよ……人間の牡って、誘惑に弱いね♪」

反論して言い負かしてやりたいのに、彼女の指摘がすべて事実なだけに、一言も返すことができなかった。足裏の間でペニスは何度も跳ね躍り、彼女の足に快感を訴え、腰がガクガクと震えてしまう。乳首も同じで、彼女の玩具のように扱われているのに、勃起が治まるどころかますます硬くなり、彼女の指を押し返して膨らんでいた。

ならばせめて、その手だけでも離させればいいというのに、先のマッサージのせいなのか、それとも性感帯への鋭い刺激のせいなのか、腕に力が入らない。それどころか腰を引いて背中を丸め、射精を堪えようとする情けない姿勢になってしまい、彼女を振り落とす動きではなく、安定して背中にしがみつかせようとする動きになっていた。

「ほらこれ、わかる？ ルミナの指責めで簡単におつきした、おにーさんのチンポ乳首……くすくすっ♪ すっごいねー、カッチカチでピクピクしてる……撫でてるだけだよ？」

摘んでいた指は離れ、代わりに両手の人差し指が、指腹を掠らせるような動きで乳首の先端を鋭く撫で擦る。触れるか触れないかという絶妙のタッチは、塗りたくられたローションによつて、掠れた瞬間に凄まじい快楽に変わり、和希の被虐欲を刺激した。

「やめっ、やつ……あつ、あああつ！ ぐっ……くあああつ！」

ゾクゾクツツと快感電流が背筋を穿ち、頭の奥が真っ白に染まるほど蕩けてゆく。腰は自然と突き上がつて括約筋が緩み、射精の感覚が秒ごとに込み上げ、肉棒を震わせた。

「……んふっ、まだダメっ♪」

だが——そこで足裏の動きはピタリと止まり、ソックスとペニスの間に空間を作つて、腰を振つても刺激が与えられないよう、絶妙な位置へ遠ざかつてしまう。

「もうっとな我慢して、本気で我慢しきれなくなつたときにい——おにーさんが狂っちゃやうような射精、味わわせてあげるから……いまはこっち♪」

「くあうううっ！ あぐっ、ま、たっ……ふうっ、はああああ……」

ピチャピチャと首筋を舐め回され、その動きに合わせるように、乳首が摘まれ、引っ張り上げられる。痛いはずなのに気持ちがいい、その倒錯した快感に唇は緩みつつ放しで、絶え間なく涎が垂れて、口元を汚していた。

「あーあ、だらしななお顔……しようがないなあ、この……ロリマゾおにーさん♥」

嗜めるようにペニスを足裏で叩かれた直後、いきなり視界がなにかに覆われた。それがなにかと気づくよりも早く、甘い香りが鼻腔に充滿し、思考が桃色に霞んでゆく。

「あははっ、また乳首とオチンポ震えたね。ルミナのスカート目隠し、気に入ってくれたんだね、嬉しい♪ それでお口も拭いてあげるから、ずっとかぶっててね」

「ひよ、れっ……んぐっ、んむううっ……」

どうやら先ほど脱いだスカートらしく、それで口元を拭いながら、鼻先を包み込んでくる。呼吸するだけでルミナの濃厚な残り香が流れ込み、その興奮は嗅覚を完全に支配して、全身の感度を数倍にも高めているようだった。腰は震えつ放し、尿道も緩みつ放しで、ペニス揺れるたびにカウパーが飛び散り、和希の脚やルミナの足裏を汚してゆく。

「うっわあ、スカートも好きなんだあ……くすくす、筋金入りのド変態だね？ 女の子の服、頭にかぶって悦んで、いきなり腰振ってチンポダンスとか、見たことないよ」

「ひ、があっ……んぶっ、んふっ、すううっ……はあっ、あぐうっ……」

否定しようと声を上げれば、大きく息を吸うことになり、ますます女の子の体臭で意識を奪われてゆく。そのせいでペニスと乳首はますます感じ、硬くなり、もはや先走り汁は絶え間なく流れ、伝い落ち、肉竿を濡れ光らせていた。

「乳首だけじゃなく、乳輪までプックリだよ？ ルミナの指で触って……って、ピクピク震えておねだりしまくってるしい、ここまで変態だなんて思わなかったな、あははっ♪」

スカート越しに耳を食まれ、恥ずかしい自分の身体の反応を的確に指摘される。目隠し

のせいで真偽の確認もできず、フーフーと息を荒くして感じることにしかできない。そこをルミナの両手がスカートを押さえて口と鼻まで塞ぎ、匂いで顔中を包み込んでくる。

「おにーさんは変態、女の子の服と乳首で感じる、超ド級のド変態おにーさん♥ そんなおにーさんに相応しい、サイッテ〜な射精シチュ……ルミナ、思いついちゃいました〜」

なにを勝手な——と怒りが込み上げるよりも早く、どんな射精をさせられるのかという興味、興奮に意識が反応してしまふ。ビクビクツツとペニスが激しく脈動して跳ね躍り、唇は勝手に動いて、スカートを押さえる彼女の手ごと、スカートにしゃぶりついていていた。

「あははっ、スカートおもしろいでちゅか〜、変態さ〜ん？ いい子だから、そのままチューチューしてようね〜？ いまから……とっておきの乳首イジメ、してあげる♥」

「んっ、おっ……んむうっ、じゅるっ、じゅばあ……ふぐっ、おうううんっ?!」

ルミナの言葉の直後、両乳首が熱く蕩けたなにか——粘膜のような柔らかく潤んだ完全食で包み込まれ、齧られ、しゃぶられ、吸り上げられる。

「んっっぐううううう——っっ!! ほおうふううっっ、んぐうっっ!!」

彼女の指ではない、それは鼻と口を押さえるのに使っているからだ。脚は片方がベッドにつき、もう片方は腰を抱えていて、ソックスもしつかり履いている。濡れた足指というわけでもない。ならば、この凄まじい快感をもたらす肉壺はなんなのか——。

「——わ、かんねええっっ……けど、すげえっ、やばいっ、気持ちよすぎっっ!!」

どこかで経験したことのある感触に近い、しかしそれとは少し異なっているし、なによ

り凄まじい快感が胸を突き抜け脳を蕩かすせいで、それ以上考えることはできなかつた。

ヌラヌラと無数の細かな舌が両方の乳首を挟んで押し潰し、舌で噛まれてるように感じてしまうほどの、強烈な肉悦に胸が痺れる。その柔らかな粘膜粒が乳首に密着し、圧迫しながら扱き上げてくる。肉壺の内側は熱い粘液に満たされていて、それを洗浄液として念入りに磨かれていくような刺激が、何度も乳首を搔き擦った。

「ふうつつ、ぐううつつ……はああつ、あおおおつ……」

「くすくすつ……乳首扱かれてるだけで、ちょー気持ちよさそうだね♪ おバカさんみたいにあーあー言つて、涎垂らして、おっぱい代わりにルミナのお指しゃぶつてえ……それってかなり、みつともないんじゃないかなあ？ ふふつ、お・ま・け・に——」

スリッと足裏が亀頭を掠めると、それだけで腰が大きく上に跳ねた。だが、ペニス全体を擦らせるよりも早く足を引かれ、和希の腰は無様に空を突き上げるばかり。

「乳首だけでチンポ盛り上がっちゃったねえ？ もしかして、チンポ触らなくつてもイッチャえるのかなあ……ふふつ、なーんてね」

そんなからかいの言葉が頭に響き、否定しようと和希は首を振ろうとする。だが——。「絶対のぜえーつたいに……おにーさんは、乳首イキでお射精しちゃうの♪」
彼女にとつてはからかいではなく、それを現実にしよという宣告だった。

「そんなわけないって思ってるう？ ふふつ、それがあるんだよ。チンポ触られなくつても、ドピユツ、ドピユッ♥ つて……堪えきれずにザーメン噴き上げる、性的弱者の口

リマゾに躡けられちゃうんだあゝ ほらここ、わかる？」

「んっつ、ふうっ……あつ、ぐうっつ……」

むしゃぶりつかれ、嘔み扱かれる乳首の傍に、鼻から離れた指が押しつけられる。そこにグリグリと円を描いて指が突きつけられ、甘いささやきが耳を蕩かしてゆく。

「お胸の快感……ううん、マゾ乳首の気持ちよさ、いまここに染み込んでるんだよ？ これがツツっつて……こつちに滑り降りてえ——」

「ああつ、はあつ、はうううっつ……」

身体を中心に縦に下りる指に従って、彼女のささやく通り、肉悦の波が下腹部へ流れ込んできた。これ以上はまずい、そう思うのに彼女のもたらす快感に抗う気力すら湧かず、抱き締められ動けない身体を、玩具のように扱われてしまう。

「——んふっ、オチンポ触ると思った？ 残念だけどお、ここは素通りでくすゝ お腹でグルグルっつて回ったあとはあ……マゾ快感、こつちに染み込んでくすゝの♡」

「ふおううううっつ、はあうっつ！ あつ、はああつっ！」

下腹部に螺旋を描いた指が腰を回り、そのまま下へ——尻谷間を伝って、その奥の窄まりを軽くタツチした。今日の一度目の射精で、カレンに散々躡けられた部分。恥ずかしすぎる牡急所、背徳快感の源、男としての屈服を強制するスイッチ——。

「こ……おにーさんの牡マ○コの奥に入っつて、前立腺にチュっつてキスしちゃうのゝ ほら、感じてるよねえ？ 乳首嘔まれて扱かれてるの、お尻に入っつてるよゝ」

「あつぐうううつつつ！ あはっ、はあああうううつ！」

すでに叫びは言葉にならず、耳にはザーザーと砂嵐のような音が響いて、頭の中は眩い光が延々と瞬いていた。そのくせ身体の反応だけは彼女の言葉に従順で、乳首を肉粒で弄ばれ続ける快楽のすべては、肉欲を蕩かして飲み込み、肛門の奥に染みてゆく。

「あゝあ、限界きちゃったね？ オチンポはビククンビククンしてるし、尿道口も息してるみたいにパクパクしちゃって……降参しましたっつて言ってる♪ 女の子でもめつたにしないよ？ 乳首でイクなんて、恥ずかしいことなのに……全然我慢できてない♪」

右耳にささやかれたと思つたら、次の言葉は左耳から響いてくる。両耳を同時にねぶられると、乳首の刺激がさらに鋭さを増し、ゾクツツと背筋が震え立った。目に見えない乳首は痛いくらいに勃起し、肉粒で擦られる範囲が増えているように思う。5ミリ以上の長さまで勃起しているであろう乳首は、乳輪ごとそれを包み込んだ肉膜の中で、無数の肉粒からサンドバッグにされていた。

（あうっ、ああああっ……マジ、だめだっ……だめっ、イクッ……イクウウッ……）

我慢や抵抗や矜持がガラガラと崩れ落ち、羞恥と屈服だけが頭をもたげ、熱い炎に身も心も意識も焼き蕩かされ、和希はぐつたりと全身を脱力させる。そこへ――。

「――あはっ、完全に降参したっ♪ いいよ、イッチャえ……マゾ乳首の屈服快感で、思いつきり射精しちゃえっ！ イケッ、イケイケイケッ♥ マゾ射精しなさいっつ！」
「んっぐうううつつつ、おとおあああああ——つつつ！」



腰を振って全身をくねらせながら、垂らされる蜜を飲み、さらに身を振らせられる。だが、飲んでも飲んでも余計に本能がその蜜を求めて疼きを募らせ、餌を求める雛鳥のごとく大口を開き、舌を目いっぱい突き伸ばしていた。

「あええええ……んべえええ、れろおおお……」

目の前で舌が踊り、半透明の唾液が言葉通り、たつぷりと顔に降り注がれる。耳や髪まで濡らされ、顔中をベトベトにされながら、甘く痺れた和希の身体は弛緩し、クローディアに組み伏せられ、まるで動けずにいた。

「反撃はおしまいでしょうか？ それでは、勝利の美酒を……頂戴いたします」

制服のボタンを外され、カッターシャツがはだけられ、シャツが捲り上げられる。下半身も同様、気がつくとベルトが外れてズボンがずり下ろされ、大きな染みを作って痛々しいほどに跳ねる、膨らんだ下着の股間が晒されていた。

「はああんっ……すごい、和希さまのオチンポ……この奥に、あの美味しいザーメンが詰まっていらつしやるのですね……たまりませんっ♥ もうよろしいですかっ、よろしいですよねっ？ 吸いますから、吸っちゃいますからあつ……はあつ、はああつ……」

瞳の奥にハートを浮かべ、全身から牝欲の匂いを漂わせだしたクローディアは、薄布一枚に包まれたペニスに触れたことで、完全にスイッチが入ってしまったようだ。どれだけ自分の身体が淫魔にとって魅力的なのか、はつきりと思ひ知らされる。

「わたくしの蜜で、興奮してくださいませね……よろしいですか？ いまから吸わせて

いただきます……とても敏感になってしまっていますから、お覚悟なさってください……はあつ、んっ……あああ、遅しいオチンポ……チンポ、チンポオッ……」

蕪触手の一部が下着の中に滑り込んだかと思うと、その先端部が吸盤のように広がり、ペニスのあちこちにペタペタと張りつき、吸い上げだした。

「くあうっつ！ あぐっ、あつっ……はああつっ！ んひっ、ひいっつ!」

植物とは思えないほど柔らかな、粘膜の塊を思わせる触手の刺激が、彼女の蜜と同じような熱い潤みを孕んで、股間を余さず舐め上げてゆく。無数の唇が肉幹を根元から先端まで絶えず擦り、しゃぶり、媚薬効果を持つ花蜜を塗りつけてくる。その状態でチュウチュウと大きな音を立ててペニスを吸われると、自分の意思ではどうにもならないほど激しく腰が跳ね、尿道を開いて先走りが大量に溢れだした。

「ああつ、もつたないっつ……しばしご辛抱くださいませ。すぐに包ませていただきます……ふふっ、これで大丈夫ですね。いかがでしょう……」

その言葉と同時に、亀頭全体を包むようにして、なにかが覆い被さってきた。

「くふあああつっ?! なんっつ……なんっ、すかっ……これええっ!」

薄い粘膜のカバーが亀頭を擦り、撫で上げてゆくような快感が広がる。接着面はもちろんだロドロに蕩けており、蜜液で敏感な亀頭を磨かれる肉悦に下半身が弛緩し、ともすればこのまま精液を吐きもらしてしまいそうな、男を骨抜きにする刺激だった。

「はああつ、可愛らしい反応っ……こちらもわたくしの触手です。蕪ではなく、花卉や蕾

を想像してくださいませ。それがぴったりと亀頭を包み、お口ですると同じようにしゃぶり、吸わせていただいております……んはあつ、先走りも芳醇ですこと……」

肉幹全体を唾える、カレンたちサキュバス型淫魔の尻尾とは異なり、植物らしさを活かした無数の植物触手による刺激が、飽きることのない快感をもたらしてくる。口で覆われているような感触のまま、握り込んだ手がそうするように亀頭が捏ね回され、強く吸われているわけでもないのに、腰がグングンと持ち上がってしまう。

その状態で、肉感はおちこちから小さな唇で吸いしゃぶられ、睾丸で生産される大量の精液が尿道に込み上げる。身体だけでなく顔も弛緩してしまつた和希は、蕩けた視線と呆けた表情でクローディアを見つめており、みつともなく口端から涎を垂らしていた。

それを丁寧に舐め取り、キスで吸い上げながら、クローディアはさらに触手の数を増やし、まだまだ残されている和希の急所を責め立てる。

「タマタマも、吸ってしまいますからあ……あむつ、んちゅううつ♥」
「ふぐうつつ!? くつひいいい——つつ!」

ささやかれる擬音に合わせ、細い触手が睾丸を啄み、あちこちからキスを浴びせ、痛烈に吸い上げた。僅かな痛みと、それを数十倍にもした、腰が抜けるような快感に全身が痙攣し、和希はたまらずクローディアに抱き縋ってしまう。

「あはんっ……和希さま、なんて大胆な……わたくし、とつても嬉しいです♥」

そう言いながら彼女のほうからも抱き返してくれ、豊かな乳房の谷間に顔が埋められた。

汗ばんだしつとりとした感触に加え、甘い香りが鼻腔に染み広がってゆく。その汗も唾液と同じ、媚薬たつぷりの花蜜なのだろう。夢中になって肌に舌を這わせると、そこから甘味と快楽が流れ込み、頭の中が際限なく痺れさせられていった。

「うふふ、赤ちゃんみたいですよ、和希さま……ええ、構いません。どうぞたつぷりと甘えられ、わたくしのおっぱいに縋りついてくださいませ……よしよし……ふふっ」

刺激が心地よいのか、クローディアの身体はピクピクと切なそうに震えて反応示し、その手が優しく髪を撫でてくれる。そのまま彼女は少しづつ身体をずらし、気がつくとき和希は彼女の膝上に背中を預け、腕に頭を支えられていた。

「さて……唾液と汗、堪能していただけたでしょうか。ですがまだ、とっておきのものを召し上がっていただいておりますから……それをお飲みになりながら、どうぞ快感に身を委ねてくださいませ……さ、どうぞ♥」

「んむっ、ちゅっ……んっ、んぐうっっ!!」

ノーブラであることには気づいていたが、ブラウスのボタンが弾けるように外された瞬間、豊乳がブルンツと勢いよく躍り出る。谷間どころではなく、乳球で顔を挟み込まれるという夢のようなシチュエーションに、吸盤で吸い上げられるペニスはますます硬くそそり立ち、空撃ちするように跳ね上がって、先走りをドクドクと吐きだした。

「メインはそっちではないのですが……ふふっ、これはこれで愉しいですね。美味しい先走りをピュッピュッしてくださったお礼に、こちらにもサービスさせていただきます」

「んぐつ、ふうううつつ……んくつ、くふううつつ……」

スルスルと胸板に触手が這い、吸盤状の先端が乳首に吸いつく。噛み抜かれたルミナの尻尾とは異なり、こちらにはたつぷりの蜜液で満たされた吸盤内で、ひたすらしゃぶられ、舐め擦られる甘い快樂ばかりが押し寄せた。

だが、その蜜液は性感神経を剥きだしにさせるような、強烈な媚薬効果を持っている。狭まり吸いついた生温かい触手粘膜に包まれ、乳輪ごとその蜜液漬けにされた乳首は、少しずつ熱く疼き、尖りだし——不意に、その感覚が激変した。

「ふぐつつああああ——つつつ?! あはうつつつ、くあああつつ!」

包皮を剥き上げたばかりの亀頭を弄られたかのように、ビリビリと電流が迸ったかと思うほどの、強烈な刺激が乳首を突き抜ける。蠢く粘膜襞に密着され吸われる、その刺激はすべて激しすぎる快感に変換され、和希は声を張り上げて全身を大きく跳ねさせた。

「大丈夫ですか、和希さま？ オチンポとタマタマと乳首、全部蜜浸しにされてしまいましたけれど、苦しくはありませんか……?」

「んうううつつつ! ふうつ、うふううつつつ! はあつ、あああつつ……」

頭が真っ白になり、返事もできないでいたが、クローディアはそれで大丈夫と判断したのか、嬉しそうに頷き、和希の頭を抱え直す。

「よかったです……それでは和希さま、どうぞこちらもお吸いください。和希さまの乳首がされているのと同じようにしていただきますと、甘い蜜ミルクがビュービューでます

ので……喉を潤しながら、どうぞ蓄の中にお射精くださいませ」

そう言いながら彼女が眼前で揺らしたのは、卑猥な爆乳に相應しい、大きく膨らんだ桃色の勃起乳首だった。ツンと上向いて震える、初々しいピンク色の乳蕾をドアップで見せつけられた瞬間、和希は本能のようにそれにむしゃぶりつき、唇を窄めて舌を絡め、けたたましい水音を響かせてそれを吸いしゃぶりだした。

「んじゅぶつつつ、ぢゅぶううつ、じゆるううつ、ぐちゅつ、ずちゅううつつ！」

「んあつ、くふうううつ……はあつ、んつ……はああつ……出、ちゃ……うつ……」

クローディアがそう呻いたと同時に、口内に甘くトロトロとした食感が溢れだす。

（なっ……ぼ、にゅ……いや、違うっ……これも——）

ミルクのような香りを僅かに感じさせるが、これも同じ、アルラウネの花蜜だ。しかも唾液や汗とは違い、よりねつとりと舌に絡みつく濃厚さがあり、甘さもさらに増している、そんな気がしてならない。

「はあっ……んっ、わたくしの、蜜ミルクは……一番濃厚な、媚薬の原液のようなものなんです……蜜の効果時間は短いです、濃ければ濃いほど即効性が——あっ♡」

説明を受けながらも蜜を飲んでいたせいで、彼女の言葉が告げるより早く、その効果を実感させられた。ドクドクと鼓動が速くなり、肉棒には太い血管が何本も浮かび上がってビキビキと張りつめ、睾丸が限界近くまでせり上がり、尿道に特濃のザーメン塊を送り込んでいるのがわかる。もちろんそれは、押し込まれる先走りをすべて啜り飲む、クローデ

イア自身にも伝わったのだろう。淫欲に頬を紅潮させ、慈愛と牝悦に満ちた表情で和希を見下ろしながら、幸せそうに頭を撫でてきた。

「あああつ……飲んでる、和希さまがわたくしのおっぱいを……んあつ、はああんっ！」
吸っているだけでは物足りるはずもなく、片手で空いているほうの乳房を握り締め、大胆に指を沈めて感触と大きさを堪能する。柔らかなマシユマロと弾力のあるおもち、それを力いっぱい握り締めても握りきれず、反発するような瑞々しい張りが返ってきた。圧倒的な質量に指を弄ばれながら、乳房を自分のほうへ引き寄せ、口に含んでゆく。

「両方、ですかあつ……はい、どうぞ……わたくしのおっぱいは、すべて和希さまに捧げて構いませんから……両方の乳首をストローにして、全部飲んでくださいませっ……」

言われるがままにジュルジュルと音を立てて乳首を吸い、出をよくさせるように乳房を捏ね回して、乳輪を丁寧に舐め回し、歯先で乳首をカリカリと刺激する。狙い通りに媚薬蜜が噴きだし、それを含むだけですます全身の感度が跳ね上がり、触手愛撫に晒されるあちこちから、凄まじい快感が膨れ上がっていた。

「和希さまの、牡肉……暴れます、ビクンビクンですっ……♥ 出ますかつ、出ちゃいますよねっ？ わたくしのミルクと触手で……はあつ、素敵っ……」

恍惚とした表情で乳悦に悶えながらも、彼女の触手操作は完璧だった。乳首が粘膜襲で隙間なく包まれ、圧迫されながら扱き上げてくる。

「んぐううつつ……じゅぶつつ、ぢゅつるうううつつ……」

その刺激で頭が真っ白になって腰を浮かせると、亀頭を包んだ花弁粘膜がグルグルと回転し、蜜液をたっぷり塗して全体を余さず磨き、蕩けさせてゆく。

「あああああ、感じます……いいですかっ、カウントします……カウントが終わったら和希さま、我慢できませんからねっ……赤ちゃんみたいにおっぱいチューチューして、お花の中にたっぷりザーメンくださいませっ、ビュービューッて……全部っ……」

そう言いながら、彼女の手がゆっくりと睾丸に伸び――。

「さーん――」

肉幹に吸いついた無数の触手が、凄まじい音を響かせてそれにむしゃぶりつく。

「にーい――」

そして指が触れるか触れないかという位置で、睾丸までが触手に吸い立てられ――。

「いーち――」

ブリッジしているかと思うほどに背中が反り返り、腰が持ち上がり、情けなくペニスを突き上げた瞬間――。

「ゼロ――はい、お射精の時間でちゅよ♥」

細くしなやかな指先が、睾丸を優しく揉みしだいた。

「んおっぐうううっつっつ?! んひゅううううっつ、んぷあつ、あはああつつ!」

――ビュルビュルウウウウウ~~~~ツツツ! ビクビクツツ、ドビュルウツツ!

「はうううんっつ♥ あはあつ、おいしっ……おいひいつ、最高ですうっつ!!」

精液を啜り上げながら、瞳をトロンと蕩けさせて、まるで絶頂でも迎えているように——いや、実際に迎えているのだろう。背中を乗せた膝の上に、彼女の排泄した牝汁の感触と、甘い香りが一気に広がってゆくのを感ずる。だが、それを指摘している余裕など、いまの和希には存在しない。

(おっふううつつ……はああつ、出るっ、出るつつ……全部ううつつ……くああつ！)

圧倒的なボリュームの乳肉に顔を埋められ、母性の象徴ともいえる子のためのエキスをたっぷり注がれ、その状態で牡欲を撃ち放つ背徳感と屈辱——そしてそれに伴う快感で、頭がグズグズに蕩けていた。

「タマタマ、しっかりと揉みいただきますから……だしてくださいっ、全部……和希さまのお情け、わたくしに吐きだしてくださいませえ……あんっ、んああつつ……」

口から注がれる蜜がすべて精液に変換されているかのように、触手の刺激を受けては精を吐きだし、身体は痙攣し続けている。愛撫による快感と射精快感が連動し、そして愛撫は止まることがない——。

(おああああつつつつ!? や、ばいつつ……止まら、なっ……んぐううっ！)

頭が痺れて全身が快楽漬けになって身悶えているが、それでも込み上げる肉悦はさらに膨らんでいった。射精中の一番敏感な亀頭までが、蕩けた粘膜で執拗に擦り上げられ、白濁を拭きこぼしながらビクビクと跳ね躍っている。

(あぐつつ……あ——なん、だっ……これっ……あつ、あああつ……)



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作フリーム系作品は100%無量の方向購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!